

読書経験が共感性の発達に与える影響

永野福三

中高生期の読書経験が共感性の発達にどのような影響を与えるのか検証した。本研究ではまず、共感性についての先行研究を概観し、共感性の定義と妥当な尺度を検討した。その上で、既存の共感性の定義を包摂した新しい共感性発達のモデルを考案し、読書経験が共感性の発達に与える影響について推定した。

共感性の尺度はいくつかあるが、本研究では登張の考案した多次元共感性尺度を選出した。この尺度は、共感的関心(他者の不運な感情に対し、その状況に対応した、他者志向の暖かい気持ちをもつ)、個人的苦痛(他者の苦痛に対して、不安や苦痛など自分中心の感情的反応をする)、ファンタジー(小説や映画など架空の他者に感情移入する)、気持ちの想像(他者の気持ちや状況を想像する)の4下位尺度からなり、青年前期・中期・後期を通して同じ意味内容で検討できる。この尺度を用いて、大学生を対象に質問紙調査を行い、小学校卒業時点から現在に至るまでの共感性の発達と、読書経験の関係を調査した。

本研究の結果、示されたことは以下の通りである。

①男子の場合、小学校卒業時点から現在に至るまで共感的関心が高かった生徒は、中学生時代の読書量が多い。

②男子の場合、小学校卒業時点では気持ちの想像が低かったが、その後に発達した生徒は高校生時代の読書量が多い。

③女子の場合、小学校卒業時点から現在の間に関心的関心が発達した、あるいは高いままだった生徒は、中高時代の読書量が多い。

④女子の場合、小学校卒業時点で個人的苦痛が低かったが、その後の低下が抑えられた生徒は、中高生期の読書量が多い。

⑤女子の場合、小学校卒業時点から現在に至るまでファンタジーが高かった生徒は、高校生時代の読書量が多い。

⑥女子の場合、小学校卒業時点で気持ちの想像が低かったが、その後に発達した生徒は、中学生時代の読書量が多い。

また、小学校卒業時点での共感性を比較したところ男女でほとんど差が見られないなど、既存の研究と異なる結果が出た。これは過去を尋ねる質問の形式に原因があると考えられ、改善の余地がある。

今後の課題としては、長期にわたる継続的なパネル調査を行うことで、より詳細な共感性の発達と読書経験の関係を明らかにすることがあげられる。

(指導教員 中山伸一)